「港川人」発見50年　点はどこにつながる？

毎日新聞 2020 年 8 月 17 日　東京夕刊

港川遺跡。中央のフィッシャー（割れ目）の下部で港川人が発見された＝沖縄県八重瀬町で7月、同町教委の許可を得て伊藤和史撮影

日本列島人類史の冒頭を飾る港川遺跡（沖縄県八重瀬町）。旧石器時代人の全身骨格がまとまって見つかった点で、世界でもまれな遺跡だ。この「港川人」が発見されたのは50年前、1970（昭和45）年8月だった。

人骨は、フィッシャーと呼ばれる石灰岩の割れ目から出た。沖縄本島は隆起したサンゴ礁でできた石灰岩で覆われている。港川遺跡は良質な石灰岩の採石場だった。

発見者は、会社経営のかたわら、地域の歴史と文化に深い関心を寄せていた大山盛保（せいほ）氏（1912～96年）。67年、庭石用に買った石に動物の化石が含まれているのに気づいた。「動物がいるなら人もいるはず」と自ら発掘に乗り出し、ついに70年、地表から20メートルの深さで港川人を発見した。約9体が見つかり、うち4体が希少な全身骨格。同時に出土した炭化物の年代測定で、約2万2000年前の旧石器時代人だとわかった。

港川人の復元模型。40歳くらいの男性。最も保存のよい1号人骨に基づく（八重瀬町立具志頭歴史民俗資料館収蔵）

沖縄本島に限らずサンゴ礁が発達した南西諸島では、石灰岩のアルカリ成分で骨が残りやすい。大山氏の熱意も加わり、旧石器時代（約1万6000年前まで）の人骨が続々見つかった。日本最古の山下町第一洞穴（那覇市、3万6000年前）、ピンザアブ（宮古島市、3万年前）、白保竿根田原（しらほさおねたばる）洞穴（石垣市、2万7000年前）などからだ。

一方、本土は寂しい限り。火山灰の酸性土壌で骨が残りにくい。それでも、以前は「○○人」と呼ばれる旧石器時代人が何人もいたが、正確な年代測定や人骨を動物骨と訂正する再鑑定などの結果、現在確実なのは「浜北人」（浜松市、1万7000年前）だけだ。

■　■

ただ、人骨が豊富な半面、沖縄では道具が見つからなかった。1万を超す遺跡から旧石器が発見されている本土とは、この点でも好対照だ。港川遺跡からも、旧石器時代の道具は未発見だ。このため道具による他の地域との比較ができず、港川人の系統上の位置づけが定めにくかった。

加えて、港川人に次ぐ沖縄の古い遺物が7000年前の縄文土器だったため、1万年以上の空白が生まれてしまった。このため港川人は絶滅し、後の人々につながらなかったとする説もある。

それが、近年変わりつつある。その象徴的な遺跡の一つが、港川遺跡の北わずか2キロ弱の⚠サキタリ洞遺跡（南城市）だ。石灰岩の洞窟（鍾乳洞）遺跡（3万～1万年前）で、2万3000年前の世界最古の釣り針とされる貝製品の発見で話題になった。他にも、3万年前の人骨、2万年前の貝器、1万4000年前の石器、さらには9000年前の土器が出土した。これらの発見が、港川人以降の空白の歴史を埋めるかもしれない。

港川遺跡自身からも新しい発信がある。八重瀬町教委の金城達（たつる）主査によると、4000年前とされてきた土器の年代が、その文様から9000年前にさかのぼった。

こうして、周囲から孤立した点のような存在だった港川人が、空間の広がりの中でも時間の流れの中でも、線としてつながり始めているのだ。

とはいえ、港川人「その後」問題はそう単純ではない。形態学的研究によれば、❗港川人骨は本土の縄文人骨とは異なり、当時、‼東南アジア方面に住んでいた人々と類似するという（国立科学博物館、海部陽介氏）。

そもそも、深さ20メートルのフィッシャーに多数の人骨が存在した遺跡の性格は何か。金城さんの話では（1）墓（2）転落事故（3）後年の洪水で遺体が流れ込んだ――の3説があるが、未解決の課題だ。ただ、50年前は困難だった古人骨の研究技術は格段に進歩しており、今後、骨自体から全くの新発見が現れる可能性がある。

■　■

八重瀬町は、港川遺跡を旧石器時代から採石場となった近代までの複合遺跡として、町の史跡に指定した。学術的価値からすれば、将来は国史跡になってほしい。それはともかく、現在、遺跡公園として整備中で、2023年4月にオープンする予定。【伊藤和史】